

NO. 47
October '09

Newsletter

神戸女学院大学
女性学
インスティテュート

働くシングルマザーのたくましさ —韓流ドラマ“頑張れ!クムスン”を観て—

上野輝将

数年前、私は、韓流ドラマに夢中になった。そして、冬ソナについて評論を書いた(「冬のソナタ」論—その保守性と革新性をめぐって—、『女性学評論』21号。2007年)。年甲斐もなく冬ソナにハマり、それを自己分析する、というのが執筆動機であった。

しかし、二年ほど前から、韓流ドラマは封印した。著作原稿に追われている毎日、DVD鑑賞では、先へ先へと観たくなり、長時間のめりこんでしまう。意思の弱い人間は「麻薬」に手を出してはいけないのだ。だが、今回、一度だけ封印を解いた。“頑張れ!クムスン”(2005年、全163話、1話30分)である。2度目だが、結構、いれこんでしまった。

さて、この作品は、美容師志望の若い女性クムスンが主人公である。両親とは生まれて間もなく「死別」し、貧しいながら祖母の手で明るく育った。高校から専門学校を経て、美容師になるのが夢であったが、20歳の時、大学生との「出来ちゃった婚」で、人生は狂いだす。スツクモンダで正式に結婚式をあげたその三日後、夫は交通事故死。ドラマは、3年後、夫の実家で、子育てしながら美容師の道を歩むクムスン・ママで再開する。

韓流ドラマの常道である、交通事故死・出生の秘密・不治の病・三角関係・嫁姑関係など相変わらずである。だが、出来ちゃった婚、シングルマザー、キャリアウーマン、生体間移植など、韓国社会の新しい社会現象が織り交ぜられ、ドラマ進行に起伏を与えたとともに、現実感を生じさせている。

ここでは、3人のシングルマザーに注目したい。クムスンとは別に、二人のシングルマザーがいる。一人は、クムスンの亡夫の兄と再婚したソンラン。インテリア会社のキャリアウーマンから経営者となる。徹底した合理主義者で、結婚しても入籍せずを主張。やむなく同居した夫の実家では、皿洗い機やお手伝いさんを雇うことを主張して、姑と衝突する。さらに、離婚で手放した子どもを引き取りたいと言い出し、夫や実

家は大混乱に陥る。

もう一人は、クムスンが勤める美容院の女社長。不倫関係で生んだ一人息子を、女手ひとつで育て、美容院経営者として成功する。クムスンには好意的であったが、外科医となった息子が、クムスンを好きになり、二人が結婚しようとなると、大豹変する。

韓国社会では、子持ちのシングルマザーは、最悪の選択対象のようだ。美容院の社長は、高卒の子持ち女と、私生児ではあるが医者の子が結婚するなど、絶対に許せない。その息子も、子持ちの既婚者と聞いたときは、当初、怒り狂ったのであった。

三人のシングルマザーは、いずれも自立した逞しい女性だ。とりわけ、クムスは、「ガンバレ!」と応援したくなるような可愛げさと、自らの運命を切り開いていく強い意思と能力を持っている。最後は、冬ソナのように、ヒロインは仕事(美容師)も愛も手に入れるが、冬ソナよりも人情話風で、家族・周辺人物が生きいきと描かれている。ソンランという女性もなかなか捨てがたかった。男より女がズット輝いている。

現実の韓国社会は、まだまだ男社会で、生きづらいところであろう。だからこそ、女性の脚本家が書き、多くの女性視聴者がドラマを観る。さて、日本ドラマでは、日本社会ではどうであろうか?

(神戸女学院大学文学部元教授:日本史)

連続セミナー「女性と子どもの人身売買」を担当して

【第1回:2009年6月12日】……………米田眞澄

●「奴隷にされない権利は保障されているか」

人身売買は、搾取を目的に、事実を偽る、相手の弱い立場につけこむなどの広い意味での強制的な手段によって人を採用したり、移送したり、受け取ったりする行為をいいます。被害者は奴隷のように扱われます。そこで、本講座では学外からの参加者と学生の参加者がほぼ同じぐらいの人数だったこともあり、学外からの参加者と学生とでグループに分かれて、奴隷とはどのような状態かについて話し合ってもらいました。皆さん、積極的に話し合いに参加してくださいました。

その後、国際社会でこの問題がクローズアップされていった要因や国際的な条約、人身売買の被害者は大人も子どもも圧倒的に女性が多く、しかも性的搾取を目的とする人身売買が多いことについてお話をさせていただき、参加して下さった皆様からも貴重なご意見をいただきました。学生も学外から参加して下さった方々と意見交換ができたことを喜んでおります。改めてお礼申し上げます。(文学部准教授：国際法学)

【第2回：2009年6月19日】……………吉田容子

●「日本の人身売買対策の現状と課題」

「人身売買」に関心を持ち講座に参加された皆様、企画して下さいました大学に、まずお礼を申し上げます。私がお伝えしたかったことをまとめてみます。

1) 今この瞬間にも新たな被害が次々と生じています。

私達の多くは偶々日本に生まれ、それなりに生活をし、危険を冒して他国に働きに行く必要はないでしょう。けれど、世界にはそうではない人々が多数おり、その立場で考えてみる必要があります。

2) 日本は世界的に認められた「主要な受け入れ国」の一つです。しかし日本国内ではこの事実が知られていません。私達のすぐそばに被害者も加害者もあり、被害を引き起こす根本原因の一つである膨大な需要を喚起・維持しているのは日本社会であるという事実が無視されています。これは新たな被害を誘因しており、事態は極めて深刻です。

3) 防止・被害者保護支援・加害者処罰のいずれの対策も重要です。特に被害防止策の一つである日本での需要根絶は日本社会の責任であり、政府だけでなく私達一人一人が真剣に考えるべき課題です。また、法律上「人身売買」の定義に合致する場合だけでなく、その周囲に様々な形で存在する人の搾取的移動もあわせて防止する必要があります。

(弁護士・立命館大学法科大学院教授：

人身取引・女性に対する暴力・外国人の人権)

【第3回：2009年6月26日】……………藤本伸樹

●「エンターテイナー、看護・介護労働者、結婚移住の女性たちの人権」

私の報告のタイトルだけを見ると、「エンターテイナー」「看護・介護労働者」「結婚移住の女性」という3つの異なったキーワードが並んでいるだけで、なん

の脈絡があるのか、不思議に思った受講者の方々が多かったに違いない。

多くは1980年代後半以降、フィリピンから来日し、短期的あるいは中長期的に滞在している女性たちが直面している「代表的な」人権の課題について、知っていただきたいというのが私の意図するところであった。

この3つの集団については、それぞれを緻密に論じなければならない一方で、搾取的な移住、ひいては人身売買につながるかもしれない深刻な共通の課題としてとらえる必要があるのではないかと考えている。

そうした意味で、これらは個別の異なった課題でもあり、同時に地続きの課題でもあるのだ。実際、過去20年以上の時代の流れのなかで、同じ女性が2つ以上、ときには3つすべての集団に属しながら生活しているという現実もある。

幸せを求めて日本にやってきて、働き、そして生活を営んでいる女性たちをはじめとする移住(労働)者の人権が保障されるための社会を、当事者と日本の市民がともに実現していくための道筋を求めていきたい。

(財アジア・太平洋人権情報センター 研究員：
共生社会研究)

【第4回：2009年7月3日】……………齊藤百合子

●「『闇の子供たち』を読み解く」

タイの人身売買を描いた衝撃的な映画『闇の子供たち』が2008年に公開された。この映画は梁石日原作を映画化したもので、人身売買とは性的搾取だけでなく、臓器売買や養子縁組の過程でも発生しうること、人身売買された子供たちを「買う」側に日本人や欧米人旅行者がいることを問題提起した衝撃的な内容である。

しかし映画と原作は、タイトルや大筋のストーリーは同じながら、「被害者をどう描くか」という点で、かなり違った作品となっている。連続セミナー第4回では、映画と原作の違い、映画が制作されるまでの取材や配慮、またタイにおける人身売買の現状を紹介しながら、『闇の子供たち』を読み解いた。

読み解いた内容は、2点に集約される。第1に、とくに被害者(子ども)が虐待される場面が第三者の視点から繰り返し描かれ、ともすれば子供たちの未来への閉塞感と絶望感を感じさせる原作に比べて、映画では被害者の視点から加害者たちの行為を見据え、映画

<P.4に続く>

ミーアキャットに学ぶ

遠藤 知二

この4月から、人間科学部の現代GPの実習で、学生たちが地域住民を対象にイベントを企画運営するのを見守っている。学生が自分たちで問題を考え、解決していく力を養うということが目標の一つなので、複数の教員が指導することになっているのだが、教師の関与は最小限にとどめるというルールがある。つまり、むやみに口を出してはいけないのだ。どこまで口を出すか、微妙なバランスがけっこうむずかしい。

去年だったか、ミーアキャットの教育行動を記録したTV番組が放映された。学生とミーアキャットを比較するつもりはないが、なぜかそれを思い出す。ミーアキャットは、危険なサソリを捕まえる技術を子供に体得させるために、教師役が生徒に練習台のサソリを提供する。はじめのうちは死んだサソリや針を取り除いたサソリが与えられるが、もう少し長じると、生きたサソリで本番さながらの訓練が行われる。生徒に教材を与えたあとの教師は、どうしているか。しばらく見守って、もし生徒が手を出そうとしなければ、関心を引くようにサソリを鼻先につきだしてやるらしい。しかし、お手本を示すことはしないようだし、『危険な餌の扱い方』といったマニュアルをつくることもない。もちろん、サソリを鼻先につきだす以上のことができないのかもしれないが、教師の役割は学習の機会を順序よく与えることにつきるのだろう。マニュアルを作りなれたわれわれ人間の教師は、そのへんのさじ加減がかえってわからなくなっているのかもしれない。

幼いミーアキャットが与えられた課題にチャレンジし、サソリと格闘するシーンはなかなかの感動ものだ。生徒はこうでなくちゃ。いや、現代GPの学生たちの名誉のために言っておけば、学生の食いつきのよさもなかなかのもの（なんだ、やっぱり比較している）。

ところで、ミーアキャットの群れでは、両性ほぼ同数のヘルパーが優位メスと優位オスの子供の養育を手伝っている。この教育行動を発見したソートンの研究によると、教師役を担うのはこのヘルパーだが、とくに性差はないらしい。だからどうということではないのだが、なんとなくほっとする。

(人間科学部教授：動物生態学)

アメリカに移住した 日本人女性の文化適応から学ぶ

出口 真紀子

アメリカと日本の両方に暮らしたことのある私にとって文化適応の問題は他人事ではなく興味深い。博士論文では、成人してからアメリカに渡り、25年以上という長期間アメリカに滞在し、永住を決めた日本人女性の文化適応のプロセスを探った。終戦後から1970年代にかけて移住した米国ニューイングランド地方に住む日本人女性10人を対象に聞き取り調査を行った。女性の年齢は58歳から76歳。平均アメリカ滞在年数は40年。かなり長期にわたってアメリカに住んでいる女性たちだ。中には英語でのインタビューを希望される方もいた。

インタビューから導きだされた文化適応の語りを分析すると4つの語りのパターンが浮き上がった。一つ目は、「Becoming American (アメリカ人になる)」、二つ目は「I Can Be Myself Here (ここでは自分らしくいられる)」、三つ目は「Finding a Cultural Niche (文化的ニッチを見つける)」、そして四つ目は「I am a Guest (私はお客さん)」である。

今回は2つ目の「I Can Be Myself Here (ここでは自分らしくいられる)」と語った女性たちに注目をしたい。彼らはそもそも日本の文化に馴染まず、アメリカ文化の方が自然に感じられたという。独立心が強く、また日本社会のジェンダーにおける不平等に憤りを感じて育った。逆にアメリカの価値観、コミュニケーション・スタイルなどが快適に感じられ、アメリカ社会にいる方が自分らしく感じられた女性たちである。

彼女たちの語りで目から鱗だったのは、自分が文化適応したという実感・自覚がない点だった。文化適応とは異文化同士の接触による相互の変容で、新たな価値観・態度・慣習・振る舞いを学ぶ、と定義づけられている。当然ながら新しい土地に数十年と移り住めば、文化適応していないはずはないのだが、本人たちはあくまで「自分は変わってない。環境が変わったせいで生きやすくなっただけだ」と強調する。文化適応という尺度でアメリカでの成功度をはかるのではなく、「日本文化との性格的な不一致」という形でアメリカ社会での生きやすさを主張した彼女たちに、全ての体験を文化適応というレンズのみで捉えることには限界があり、やはり本人の立場から異文化適応をどう意味づけるかを明らかにしていくことの重要性を改めて教えられた気がした。

(文学部客員准教授：グローバル・コミュニケーション)

で表現される月や大木など、生命力への想像力をかき
たてやすい作品となっていること。

第2に、タイにおける人身売買は、まだまだ撲滅に
は至らないが、被害者保護や支援を強化した包括的な
人身売買禁止法を施行するなど、積極的に取り組まれて
いるとの現状である。

(恵泉女学園大学人間社会学部体験学習室主任：
タイ地域研究・人身売買・社会調査)

2009年度前期活動報告

特別講演会

2009年6月5日(金) 10:35~11:25

「近江絹糸人権争議とクリスチャン」



上野輝将氏

会場：神戸女学院講堂

講師：上野 輝将氏

(神戸女学院大学元教授)

出席者：約170名

連続セミナー「女性と子どもの人身売買」

会場：神戸女学院大学ジュリア・グッドレー館104教室

<第1回> 2009年6月12日(金) 14:00~15:30

「奴隷にされない権利は保障されているか」

講師：米田 眞澄氏

(神戸女学院大学文学部准教授：国際法学)

<第2回> 2009年6月19日(金) 14:00~15:30

「日本の人身売買対策の現状と課題」

講師：吉田 容子氏

(弁護士・立命館大学法科大学院教授：

人身取引・女性に対する暴力・外国人の人権)

<第3回> 2009年6月26日(金) 14:00~15:30

「エンターテイナー、看護・介護労働者、結婚移住
の女性たちの人権」

講師：藤本 伸樹氏

(財)アジア・太平洋人権情報センター研究員：
共生社会研究)

<第4回> 2009年7月3日(金) 14:00~15:30

「『闇の子供たち』を読み解く」

講師：斉藤 百合子氏

(恵泉女学園大学人間社会学部体験学習室主任：
タイ地域研究・人身売買・社会調査)



米田眞澄氏

吉田容子氏



藤本伸樹氏

斉藤百合子氏

[受講者：48名、平均出席者：33名(67.7%：当日参
加者を含む)、修了証交付者：28名]

2009年度後期講演会等のご案内

■学外講演会

会場：西宮市大学交流センター

(ACTA西宮 東館6階) ※阪急西宮北口下車すぐ

(第1回) 2009年10月8日(木) 13:30~15:00

「水を考える」

講師：張野 宏也氏

(神戸女学院大学人間科学部教授：環境科学)

(第2回) 2009年11月11日(水) 13:30~15:00

「女性のためのフィールドサイエンス体験案内
～自然に出会うイギリス小旅行」

講師：三宅 志穂氏

(神戸女学院大学人間科学部准教授：

科学教育・環境社会学)

2009年度女性学インスティテュート編集委員

谷祝子、津上智実、鶴野ひろ子、渡部充(委員長)

(ABC順)

編集事務：藤岡裕美

編集・発行：神戸女学院大学女性学インスティテュート

☎662-8505 西宮市岡田山4-1 TEL/FAX:(0798)51-8545

URL <http://www.kobe-c.ac.jp/gender/>